

明治の時計



一、はじめに

三重県庁舎の修理保存工事で一時閉鎖していた「明治の時計」展示室が平成二〇年四月一日にリニューアルしました。今回の展示では、前回の展示時計を中心に、輸入・国産時計を並列展示し、時計のデザインを比較しながらご覧頂けるようにしました。

二、西洋時計以前の「和時計」― 檜時計

国産の機械時計自体は、徳川家康が存命していた時、すでに登場していたようです。この時計は西洋から伝来した時計をもとに、不定時法の時刻を表示できるように工夫を加えて製作された機械時計「和時計」です。写真1は「檜時計」と呼ばれ、錘を動力としています。時刻を示す時刻盤(写真2)には「十二辰刻」の時刻や「子丑寅卯…」の十二支の文字盤、年度を干支で示す暦日があるなど、西洋時計とは違う型の時計になっていることが分かります。また、檜時計は台の部分などに見られる装飾の工芸的価値も高く大名たちに珍重されました。しかし、「和時計」は幕末に製作された万年時計を最後に明治以後は廃滅しました。



写真1



写真2

三、西洋時計の導入

明治になり外交や汽車・電信が発達してくると正確な時間が必要となり、和時計では支障が出てきたため、明治政府は明治六(一八七三)年、旧暦を廃すと時刻も昼夜を二四等分した現行の時刻法に改めました。当初は二四時間制に合う国産時計を生産することが不可能で、外国商館を通じて輸入した時計に頼る事になりました。その後、国内でもアメリカやドイツなどの欧米の時計を研究し、模倣から新たな技術が創出され、明治十三年、金子元助(金元社)によって国産時計の製造が始まりました。

ここでは、輸入時計と国産時計、そして輸入時計と林時計(時盛社)の時計ラベルとの類似点を紹介します。

① 四ツ丸掛時計

イングラハム時計会社製(INGRAHAM CO.) (写真3) 福田時計製造合資会社製 四ツ丸掛時計(写真4) 日本の四ツ丸掛時計はイングラハム社の時計をモデルに製造したといわれています。当時、日本で四ツ丸時計といえは「イングラハム」と言われるほどイングラハム社の時計は有名でした。四ツ丸時計も八角時計と同時期に輸入されましたが、当初は、丸の配置が悪く八角時計と比べると人気が無く、なかなか人々に受け入れられませんでした。イングラハム社は不揃いな四ツ丸の丸のバランスを研究し、のちに今日目にするような丸の配置に到り「だるま時計」の愛称で、庶民に受け入れられ、八角時計と共に定着していきました。

福田時計の四ツ丸時計はイングラハム社の時計を模倣したといわれるものです。この二つを比較してみると時計の文字盤も算用数字ではなく、ローマ数字で表記し小さな丸も同じ配置にし、外見を同じ型に仕上げていることが分かります。またイングラハム社の四ツ丸時計は金



写真3



写真4

達磨と呼ばれる真鍮部分に金鍍金を施した時計が有名でしたが、これを模した福田時計は塗料が剥落しています。表面が金色に見えるよう「箔下漆」を塗り、金箔を貼って仕上げるという、日本の伝統技法が使われています。当時、輸入時計には金属が使われていましたが日本ではまだ手に入りやすく、使用している素材は違いますが職人たちが輸入時計を忠実に仕上げようとしていたことが分かる一品です。

② ラベル

輸入時計(写真5)

林時計(注1) 中条勇一郎作の八角合長掛時計の時計(写真6) 時計職人たちは、外見を模倣し国産時計を製造していましたが他にも類似点が見受けられます。それが振り子室に張られているラベルです。

明治初期に輸入されたニューヘブン社(NEW HAVEN CLOCK CO.)製の八角兵庫掛時計(注2)の振り子室ラベルには英字で「Patented June, 13, 1871. Octagon Eight Day Clocks, Silent, Striking, and Calendar. For Hotels, Offices, Etc. ALL WARRANTED OF THE BEST QUALITY New Haven Clock Co. New Haven, Conn. U.S.A.」

(一八七一年六月十三日特許品 八日巻き八角時計：中略：品質保証 ニューヘブン社 ニューヘブン市コネチカット州 アメリカ)のように「何日巻き時計」・「製



写真5



写真6



写真7

づくり日本」の原点を垣間見ることのできるものではないでしょうか。明治村の時計は毎週ネジを巻き動態展示を行っています。

「明治の時計」展示室で、当時のモノづくりの息吹に触れてみてください。

(注1) 林時計(時盛舎) 名古屋に設立した時計会社で工場に初めて蒸気機関を据え付け動力とし、時計の量産製造を行なっています。(注2) 八角兵庫掛時計の兵庫は立兵庫とい花魁の後姿のこと。花魁は後から見ると、頭に丸い輪を付けた髪形をしておりその形に似ていることからこの名がつけられた。

の無い振り子室のラベルにも、輸入時計のラベルの形式等を模倣して製造していたという点は当時の国産時計を見ていく上で面白いのではないのでしょうか。

四、終わりに

国産時計は、明治三十年代前半になると大量生産出来る会社が次々に設立され、明治三六年には輸出用時計が輸入時計をしのぐ生産量となり、明治の終わりに掛時計は輸出産業にまで成長していきました。日本の国産時計の製造は輸入時計の模倣から始まったものであり、「モノ

介したいと思います。

この建物全体の印象としては西洋風と見られるこの建物の柱は、「胡麻殻決り」と呼ばれ、建物一階・二階の左右対象に配されています(写真1)。全ての柱には縦溝が彫られていて、径の小さな円柱を束ねたような形状となり、その断面は八枚の菊花柄の花弁のように見えます。この造形は、禅宗様の仏壇の一部に用いられたりします。また、この柱頭(写真2)には、八角形で下部に丸みを施した部材を二段に重ねて飾り、唐様(禅宗様)建築の礎盤(写真3)が柱下端に取りつけられていて、ここに西洋風な印象を与えながらも、同時に日本の伝統的造形を感じることが出来ます。

ところで、この柱とは対照的な形をしたギリシャ・ローマの古典建築の柱は、五丁目の内閣文庫の正面に見られます(写真4)。その形は、「胡麻殻決り」とは違い、装飾溝(フルーティング)によって柱表面は凹面のヒダになっており、その柱の種類は、柱頭部分の装飾表現によって異なります。では、何故このような建築が誕生したのでしょうか。これには複数の可能性が考えられます。一つは、東山梨郡役所の建設にあたり、地元の棟梁達が西洋建築の描かれた錦絵を参考に建てたため、造形の細部まで見て取る事が出来ず、柱の側面の凹凸を逆に解釈してしまった。

二つ目の可能性としては、柱に礎盤が設けられていることから、柱全体を西洋のスタイルで創り出すのではなく、日本の棟梁の意匠や伝統的技術を表現しようとしたのではないかと考えられます。

このように、建物の装飾一つを取っても、そこに至るまでには様々な経緯や可能性が考えられます。当時の職人達が何をみて、どうしてそのような装飾に行き着いたのか、という背景は定かでない事もあります。しかし、いずれにせよ、そこには単なる西洋建築の真似ではなく、日本の環境や好みを意識した、日本独自のスタイルが確実に息づいているように感じます。是非、職人達の意気込みをご覧ください。



写真2 柱頭



写真3 礎盤



写真4 内閣文庫の柱

A La Meiji-mura

柱に込められた思い

●東山梨郡役所(二丁目16番地)



この建物が建設される以前には、すでに五十棟もの洋風公共建築が竣工していたそうです。つまり、こうした洋風建築の技法がこの地方では定着し、いずれの職種も習熟していた事が伺えます。

この建物の特徴は、大学で西洋建築を学んだ建築家ではなく、地元左官・土屋庄蔵と職人達によって建てられた点と、洋風でありながら、日本の伝統的な木造技術を駆使して建てられた点にあり、洋風に似て非なる建築を意味する擬洋風建築であると言えます。土屋庄蔵は、琢美学校(明治七年)、甲府裁判所(明治八年)、山梨県庁舎(明治十年)の工事に、左官職として参加していて、すでに、洋風建築に豊富な経験と備えていたと思われ、今回は、その特徴がよく表現されているペランダの柱を紹介

レンガ通りを見守るかのようになっている東山梨郡役所は、明治十八年に東山梨郡役所の新庁舎として山梨県日下部村に建てられました。明治六年から二十年まで、山梨県令として在任した藤村紫朗は、洋風化を強力に推進した人物として知られ、この地方ではこうした洋風建築を「藤村式」と呼んでいました。こ

この建物全体の印象としては西洋風と見られるこの建物の柱は、「胡麻殻決り」と呼ばれ、建物一階・二階の左右対象に配されています(写真1)。全ての柱には縦溝が彫られていて、径の小さな円柱を束ねたような形状となり、その断面は八枚の菊花柄の花弁のように見えます。この造形は、禅宗様の仏壇の一部に用いられたりします。また、この柱頭(写真2)には、八角形で下部に丸みを施した部材を二段に重ねて飾り、唐様(禅宗様)建築の礎盤(写真3)が柱下端に取りつけられていて、ここに西洋風な印象を与えながらも、同時に日本の伝統的造形を感じることが出来ます。

ところで、この柱とは対照的な形をしたギリシャ・ローマの古典建築の柱は、五丁目の内閣文庫の正面に見られます(写真4)。その形は、「胡麻殻決り」とは違い、装飾溝(フルーティング)によって柱表面は凹面のヒダになっており、その柱の種類は、柱頭部分の装飾表現によって異なります。では、何故このような建築が誕生したのでしょうか。これには複数の可能性が考えられます。一つは、東山梨郡役所の建設にあたり、地元の棟梁達が西洋建築の描かれた錦絵を参考に建てたため、造形の細部まで見て取る事が出来ず、柱の側面の凹凸を逆に解釈してしまった。



写真1 胡麻殻決りの柱